

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本におけるネット自殺
Author(s)	ブルキッチ, イヴァン
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 29期 : 97 - 108
Issue Date	2014-10-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038692
Right	
Relation	



日本におけるネット自殺

イヴァン・ブルキッチ

はじめに

日本は「自殺の国」として見なされている。世界の国々と比べると、日本では自殺率は高いものの（2013年、世界第8位）相関がある、予測されるように一番高いとは言い切れない。日本人の自殺の由来はなんだろうか。

90年代より自殺した人々はほとんどが中年者だったが、現在老人の自殺率も減少しはじめ、若者の率が増加しつつある。30才以下の日本人に対して自殺が一番の死因となっている。そして2000年頃までは、日本では自殺防止という概念はさほど注目されていなかったが、それ以降日本の自殺の方法は変化が見え始め、自殺防止にも注目が集まっている。2001年から、若者の中で「ネット自殺」か「サイバー自殺」といった呼び方がされている社会現象が始まった。日本ではネットが普及してから15年以上経ち、ネットの世界では匿名の書き込みが多くなっている。このネットには、長所と短所がある。長所は、欲しい情報が手軽に取得できるなど多くあるが、短所としては、軽い気持ちで自殺を勧める人による悪影響があり、ボディ・ランゲージが伝わらない事から誤解が生じやすい点があげられる。

ネット自殺という社会現象は日本だけの問題ではなく、日本と韓国でもっとも多いとされているが、日本特有の問題あるいは問題の対処があるのではないかと考えている。

ネット自殺の掲示板と掲示板のユーザーの特徴を理解するために、心理学の知識も必要である。その上でネット自殺掲示板に入り、書き込みを分析する必要がある。そうしてまず自殺に関する掲示板に入った人々の本当の理由を調べることで、その心理を理解することができるからである。つまり、ここからネット自殺を防ぐための方法を見つけられるかもしれないのである。

そこで本研究では、日本にしかないと思われている「ネット自殺」という現象を概観した上で、「自殺掲示板」の特徴を明らかにし、それへのネガティブなイメージではなく、メリットを指摘することを目的とする。

まず、「ネット自殺」に関する基本データについて先行研究および各種統計から明らかにし、次に歴史的に日本における自殺現象の根拠を検索し、日本ならではの「ネット自殺」現象の理由を検討する。さらに「自殺掲示板」を訪問して、Sueki と Eichenberg が論述した「自殺掲示板」を頻繁に利用する四つのユーザータイプが投稿した書き込みを比較分析する。最後に自殺掲示板の有益な面を明らかにする。

第一章では、歴史上日本における自殺の根拠を調べ、日本と西洋では自殺を比較する。

第二章では、「ネットの自殺」の統計的な情報と特徴を明らかにする。第三章では、自殺掲示板の利用動機に関して論述する。第四章では、人々はインターネットで救助を求める心理学的な理由を検討する。第五章では、自殺サイト規制と自殺予防に関する情報を整理する。

1. 日本における自殺のルーツ

自らの意思で自らの生命を絶つ行為。その概念、法律上の扱われ方は時代、地域、宗教、生活慣習などにより異なる。原因は多種多様であるが、Emile Durkheim は『自殺論』で社会的に解明した。彼は社会的には自殺の個人的動機そのものよりも、主として自殺に追い込む諸要因を解明することによって自殺への傾向や社会構造的な特徴を明らかにしようとした。自殺の手段も多様で服毒、ガス、縊首、などがある。自殺者の増減には、社会情勢が大きく影響することも見逃せない。日本ではかつては青年層の自殺が多かったが、その後 65 歳以上の老人の自殺率が非常に目立つようになってきており、動機としては病苦が圧倒的に高い比率を占めている (Durkheim, 1960)。

日本における自殺人数は外国と比べ非常に多い (主要国 G8 国日本は上位) (WHO, 2013)。1998 年から日本の自殺者数が急増した。1997 年と比べ約 20-30% 急増した。20-30 代の中で死亡の主因は自殺である (Naito, 2007)。日本の世論によると自殺は段階過程である。ステップ 1 は長期景気後退、ステップ 2 は失業で鬱病になることは多い、ステップ 3 では自殺率が増える (Ueno, 2005) (De Silva, 2008)。第二次世界大戦後日本は社会政治的にも、経済的にも 1950 まで非常に困難な年は時代に直面したが、1960 年代から世界の裕福な国の一つになった。90 年代にグローバルでも起こった不況で自殺率が左右されたかもしれない (Naito, 2007)。警察庁の統計によると 1978 年から 2004 年までに自殺率と失業率が正比例している (NPA, 2014)。

では、日本における自殺の現状が昔の日本文化と関係がないと言い切れるのだろうか。De Silva は、西洋で自殺をする人の 90% 以上は鬱病にかかっている。一方で日本の自殺について主の特徴は文化的な美意識 (エステティック) を指摘している。日本では昔のから手紙や歌や詩歌を交換することで恋愛をすることが多い。1700 年ごろに近松門左衛門によって書かれたものの中で非常に有名なのは「心中天の網島」である (Wikipedia, 2014)。日本は海外で「自殺の国」というイメージを持たれている (Pinguet, 1991) (De Silva, 2008)。

劇の中では、自殺についてきれいで優雅な言葉が使われた。そのため、自殺は怖いという意識を起こさせなくなり、美しくて平和的なものにさえ聞こえるのかもしれない。

自殺の日本文化的な知覚はアメリカの知覚より寛大である。日本で自殺は成熟と責任の兆候として道徳的にとらえられている (De Silva 2008)。自殺は長年にわたって自分や家族の名誉を守るための行為であると文化的に関係づけられている (Ueno, 2005)。

伝統的に日本の自殺が認められたものである。一般的には日本の自殺は伝統的に自分の

自由意志を表している。したがって日本で自殺は合理的に決定されるものである。Da Silva は、自殺が起こる場合は周りの人に認められにくい傾向にある事を指摘している。日本で 1900 年から精神科医が制度的に既成されていたのに日本人の自殺について概念がさほど変わらなかった (De Silva、2010)。

Pinguet によると歴史上、自殺する理由は下記の理由だけでなく非常に多い。現在においてほとんどの理由は理解できないが、それにも関わらず日本がかつて豊かな自殺文化を持っていたと思われるであろう。

- **人柱** (神殿や橋などの建設に当たり、その基礎に人間を生埋めなどの形で供犠する人のこと。)
- **粗忽死** (自分の失敗の贖罪のこと。)
- **責任、引責自殺** (自分だけではない、家来や弟子のためにも責任を持つこと。)
例: STAP 細胞論文をめぐる問題で笹井芳樹理化学研究所発生再生理科総合センター長が 2014 年 8 月 5 日、首をつって自殺した。同じ研究室の小保方春子が物議を醸す論文を執筆し、スキャンダルが起きたことは自殺の理由の一つであった。笹井が責任を追い、この事件も引責自殺の一例と考えられるのであろう (Japantimes, 2014)。
- **商い腹** (武士達は主君の自殺行為にお供し、自分の忠誠心を証拠し、武士の家族の在世安定を担うこと。)
- **心中、情死** (愛し合っている男女が、合意の上で一緒に死ぬこと。)
- **面目** (名誉を守るために自殺すること。)
- **論腹** (世道人心と衝突し、自殺すること)
- **憤死** (軽侮や憤慨で自殺すること。)
- **追い腹** (愛している人を死まで追いかけて自殺すること。)
- **親子心中、一家心中**
- **無理心中** (無理やり心中すること。死ぬつもりのない相手を殺して自分も死ぬこと。)
- **殉死、義腹** (主君が死亡したときに、臣下があとを追って自殺すること。)
- **無念腹** (不当で自殺すること)
- **苛め自殺** (職場や学校で苛められ、自殺すること。)
- **叱られ自殺** (恥や抗議で自殺すること。)
- **諫死** (死んで目上の人をいさめること。また、死ぬ覚悟でいさめること。)
- **玉碎** (玉のように美しく砕け散ること。全力で戦い、名誉・忠節を守って潔く死ぬこと。)

目覚ましいことに上記理由の中で鬱病と関係のある理由はない (Pinguet、1991)。一方ヨーロッパでは 19 世紀から自殺は疾病としてみなされていた (Morahan, 2005)。また西

洋で自殺は犯罪としてとらえていたが、日本では名誉を守りながら尊敬すべき死ぬ手段として評価されていた。De Silvaによると日本は遵奉社会である。したがって日本における自殺は「自由意志の行為」ということにみられている可能性である (De Silva, 2008)。Pinguet は、日本は外国人だけではなく、日本人でさえ日本は「自殺の国」と思われている事を指摘している。「腹切り」と「切腹」という言葉は外国語でも日本語の用語発音のまま使用されている (Naito, 2007)。バブル経済崩壊後、上記説明した「引責自殺」が増加されていた。それをみると日本は外国と比べ、やはり自殺を許されやすい国ではないだろうか (Naito, 2007) (Ueno, 2005)。無論、歴史上日本でも死生の観念が変わった。難波紘二は、「武士道とは死ぬことと見つけたり」と説く『はがくれ』が尊重されたことから明らかのように、明治以前の日本の歴史をみると、自殺を不定した論述はまったくない。このように、もともと自殺禁止の倫理がなかったにも関わらず、現在は変わってきたと論述している。明治時代まで日本は鎖国であったため、日本人の日常生活にキリスト教から影響はほぼなかったので自殺も妊娠中絶も許されることができた。しかしながら、明治維新から日本はフランスとドイツのキリスト教に影響された法律を受け入れたため、で社会状況がきびしくなった (難波紘二, 2004)。

第二次世界大戦の期間中に日本の政府は自殺を宣伝した。日本政府にたいしての反抗をふせぐために古代の武士道の英雄的な思想や道徳などを復活させた。第二次世界大戦を讃美するため、とくに「神風」を偶像化した。自殺は敵への「人間武器」として宣伝されていた (Ueno, 2005)。

2. ネット自殺

日本は「自殺の国」だと知られているので自殺事件のことが頻繁にメディアに取り上げられている。それはなぜかというとはかの取材がない場合、社会問題が取り上げられがちだからである。さらに新しいフェノメノンはいわゆる「ネット自殺」である。全国の自殺率によって、実際にネット自殺の割合が少ないが (2005年: 91/34000)、ネット自殺の被害者は若者が多く見られている (Sakamoto, 2011)。インターネット上のある自殺ホームページや自殺掲示板が自殺に関する情報を給されている。日本だけで60万以上の自殺に関するホームページである (Hagihara, 2011)。日本ではネットが普及してから15年以上経ち、ネットの世界では匿名の書き込みが多くなっている。このネットには、長所と短所がある。長所は、欲しい情報が手軽に取得できるなど多くあるが、短所としては、軽い気持ちで自殺を勧める人による悪影響があり、ボディ・ランゲージが伝わらない事から誤解が生じやすい点あげられる。死にたいとおもっているのに、その思いを語る場所がない、そんな人にとって、ネットは思いが叶う良い場所になる。匿名者の中で、本音出すことができる。しかしながらマニアックな趣味の人が集まるように、「自殺」を嗜好する人々が、ネット上で集まることできる。普通なら話せないような内容、普通なら止められてしまうの会話を、ネット上で思う存分できる (Naito, 2007)。Morohanの青少年のイン

ターネット使用研究によると、寂然な青少年がその寂しさの空間を充填するために、インターネットを頻繁に使用する。インターネットに信頼すればするほど、実在の生活から距離を置くようになり、インターネット以外の社会的な活動は尚更減少する。また再び寂然感や空間が産み出され、それに対応するには青少年が更にインターネット使用量を増やす (Morohan、2005)。このように、悪循環が発生するのである。「引き籠もり」の現象も似たようなパターンをとるとも言えるであろう。その一方、こう言った脆弱な青少年にインターネットが提供するメリットを見逃してはならない。若者は自分が抱えている問題をインターネットで遠慮せずに発言できる。また苦労した際に、インターネットで同感している人に相談や健康のアドバイスも簡単に得ることができる (Suler、2004)。

「ネット自殺」はいつ普及したか明確に分からないが上野氏によると 2000 年からであると想定されている。普通のグループ自殺 (心中、一家心中、親子心中など) と違って、ネット自殺の場合、見知らぬ人である。ネット自殺はメディア上で特に注目をされている理由は、被害者の年齢である (Sakamoto、2011)。2004 年にでた「妄想代理人」アニメで自殺が写實的に描かれて、それは 2000 年のある実験の影響はであったと言われている。七輪の利用で多くの人々がグループ自殺したということが提示される。

(De Silva、2010)。

日本社会の中で若者の命は絶対に守るべきことである。日本では、古代から子供が宝と言われており、天からの授かりもだと思われてきた。子供は生まれながらに純粋で無邪気で、周りの成人によって汚されてしまう傾向が強い。その一方、欧米や西洋の社会では、罪を重ね、汚らわしく生まれ、生きている間に自分の良い行動でその罪を洗うべきだと言う思想が根強くみられる。

自殺願望のある若者がインターネットを使い、自殺に関する情報 (自殺方法、同士を募る) が匿名で得られる。また、ネット自殺系サイトの中で自殺を教える写真が多く存在する。それで、個人が有する自殺要因が契機に自殺行為になる可能性がある (Adekola、2006)。

3. 自殺掲示板の利用動機

いわゆる日本の「自殺掲示板」に入る人々は 4 つのグループタイプに分けられる。

- **第一因子**：自殺と自殺予防の是非について話すため、自殺の危機に瀕する人への対処を知るため、他者を助けるためといった内容への因子負荷が高いことから、[援助]因子と名付けた。
- **第二因子**：主に自らの自殺願望を知らせ、「相談／打ち明け」因子と名付けた。
- **第三因子**：自殺願望の克服や専門家のアクセス方法を知るためといった内容から、「克服／治療」因子と名付けた。
- **第四因子**：ネット心中相手を探す、効果的な自殺方法を探すといった項目の因子

負荷量が高いことから「自殺準備」因子と名付けた (Sueki, 2011)。

動機による利用の類壁とその特徴

利用動機尺度の各下立尺度得点を標準化した得点を使って、クラスタ分析を行った。その結果下記のグラフに表されている。

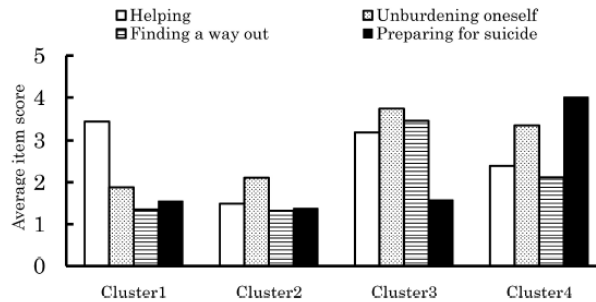


Figure 1. Results of cluster analysis.

クラスタ 1 (28 名) は「援助」がクラスタ 3 と有意差はないものの 4 群の中で最も高く、その他の下位尺度得点は低い値を示していたため「援助」群と命名した。

55 名前: さくら 投稿日: 2014/07/25(金) 09:41:18 ID:Bo5C9gvAO

皆さん今まで悲しい事があったんですね よく分かりました

でも死んでしまったらそこで本当に終わりなんですよ

今はつらくて 死にたいと思ってるかもしれない
けどつらいまま死んでいいんですか

いつかとても幸せな家庭をつくり
少しずつ 幸せな人生をつくってってください

きっといつのまにか 笑顔になっているはずです

(Shitaraba, <http://jbbs.shitaraba.net/computer/30691/>)

クラスタ 2 (46 名) は全て動機が低い値を示していることに特徴を有していた。そこで、「目的不明確」群と名づけた。



クラスタ 3 (37 名) はクラスタ 1 と同程度に「援助」が強だけでなく、「相談・打ち明け」と「克服・治療」の得点も 4 群の中で最も高かった。そこで、「自助グループ」群と名づけた。



クラスタ 4 (26 名) は「自殺準備」の得点が他のクラスタより有意に高いことにその特徴を有していた。ただし、「相談・打ち明け」がクラスタ 1 や 2 より高いことから、「相談・自殺念慮高」群とした。



自殺ウェブサイトでもっともトラフィックが多いのは生き続ける動機や楽しみを求めている人である。しかし、多くの人にとってこの求める楽しみが自分の命を自ら奪うことまで及ぶ (Shitaraba,2014) (Sueki,2011) (Eichenberg,2008)。

自殺系サイトに集まり、自殺掲示板に書き込みをしている人々は、全員次々と自殺してしまうというイメージを持っている人がいるのではないだろうか。しかし、そんなことはないのである。もしそうであれば、自殺サイトは、次々となくなっていくはずだ。実際には、多くのサイトが継続をしている。集まる人々は、「死にたい、死にたい」と語り続け、明日もまた自殺サイトにやってきて、自殺掲示板を見るのである。したがって、「死ぬ、死ぬ」といっている人々に限って「死なない死なない」などという誤解するべきではないだろうか。自殺への思いを語る事自体は、むしろ自殺予防の効果さえであろう。ネット自殺事件のように、具体的な自殺の準備をスタートさせてしまうことになると、やはり危険なサイトというになる (Usui,2003)。しかしながら、下記のグラフに表せるように、Sueki と Eichenberg によるとこの掲示板を通じて四つのあらゆるユーザタイプが自殺思想を減少させたことが明確になった (Sueki,2011)。

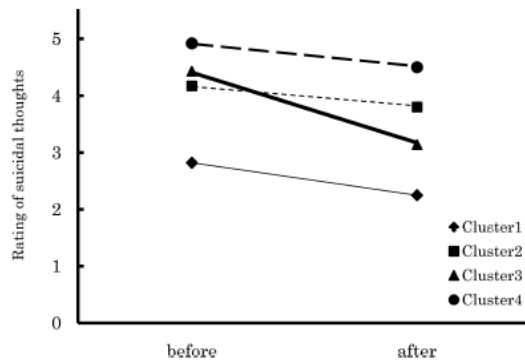


Figure 2. Influence of BBS usage on suicidal thoughts.

4. ネットが使われている理由

ネット自殺の掲示板と掲示板のユーザーの特徴を理解するために、心理学の知識も必要である。アメリカの心理学者である John Suler によるとネット心理学上には行動パターンが5つある。

一つ目は「Dissociative Anonymity」である。人々はネットで言ったり、書いたりことを現実の生活と簡単に繋げられない。

二つ目は「Invisibility」。自分が見えないということだ。したがって羞恥はなくなる。一般的に実際にも、心理者は顔が見えないように患者の後ろに座っていることだ。

三つ目は、「(Asynchronity)」。メールや掲示板のコミュニケーションは非同期なことだ。つまり、人々は現実の時間内に対話、返答しない。返答するには、自分の考えを整理するための時間の余裕がある。

四つ目は「(Dissociative Imagination)」。インターネット上の生活は遊びのような（ゲーム）ものである。その遊びのルールや規則などが現実の生活に適用しない。好きなときにログアウトやログインができて、ネット上の対話はまったく遊びに相違ない。

五つ目は「(Minimizing Authority)」。インターネットで参加する人々は全員平等だ。インターネットでさえ集中管理なし作られたものである。インターネット上で対話するとき相手の資格が不明である。したがって、相手はある会社の社長かただの社員かとは関係なく、相手の不承認や不満を得る恐れはない (Suler, 2004)。

5. 自殺サイト規制と自殺予防

日本では、たとえ自殺系サイトを規制したくても、表現の自由のために、禁止するのは困難である。日本のインターネットのプロバイダーが技術的な理由で簡単に禁止できない。しかし、自殺系サイトを禁止しても、これらの自殺系サイトは他の場所へ移るだけであろうか (Usui,2003)。また、自殺掲示板に例えば「自殺」といった文字が出れば何らかの規制をかけるといったシステムを作ったとしても、おそらくこれらは隠語を使うだけではないだろうか。上述したようにインターネットが潜在的に自殺傾向を持っている人を援助する。さらに、その潜在的な自殺傾向を持っている患者の評価や治療や予防にも役立つ (Adekola,2006)。

インターネットを通じての自殺の抑止の方法は、下記の通りである。自殺抑止は三つの段階で実施される。自殺防止(Prevention)、自殺介入(Intervention)、自殺事後対応(Postvention)である。自殺防止というのは自殺動機の原因のことである。その原因を発見させて掲示板を通じて自殺防止の情報と援助を提供する。自殺介入というのは自殺しようとする患者の心中未遂防ぐための適切な介入のことである。この段階で掲示板とEメールを通じて相談を提供する。自殺事後対応というのは自殺した被害者の周りの人に心理的に適切なケアを提供し、心理的な余波を軽減することである (Sakamoto 2011)。

掲示板の書き入れを見ると自殺をしたいと思ってしまうユーザーは学生、フリーター、ニートが多いと分かる。人生で若者が生きがいを見つけられないとつか社会の圧力で鬱病になるのではないだろうか。学校やバイトと仕事では失敗をすると叱られたら自信が持てるようになれないではないか(De Silva, 2010)。若者が自分の能力を信じられなくなる。したがって日本人の若者の中では段々と社会から隠れることが多くなる。下の書き入れが見ればユーザーの状況が分かるかもしれない。ユーザーは自分に対する自信がなくて、という「生きがい」がなさそうである。

例)

259 名前: **けん** 投稿日: 2014/07/05(土) 22:32:42 ID:6ndA4Uj60
なにも出来ない、結果が出ない、出そうともしない。こんな欠陥人間は廃棄したい。死んでゼロになりたい。

そのような「生きがい」を持つことは大事なことである。日本だけではなくヨーロッパの哲学の中でも「生きがい」の原理である。ヨーロッパのフランスでも「生きがい」と似ていることである。フランス語では「raison d'être」と言われている。翻訳すると「ここにいる理由」になることだ。

Naito による学校構内上の自殺介入を無視してはならない。学校構内上の自殺介入は一次の自殺防止として提案されているが日本ではタブーや汚名に関わり教師は直接的な「自殺防止」を提供するのを控えるので第一次防止として貧弱である。自殺傾向を持っている

生徒達に支援しなければならない (Naito,2007)。学校と大学でも争い所ではなく知識欲が旺盛であるべきである。また、学校では苛めが起これたらすぐに苛められた学生に「あなたのせいではない！」と言わなければならない。日本の文化は「恥の文化」という文化の犠牲者はそれが自分のせいだと思う自らを責めるために起こる自殺が多く、それを食い止める方法が最も重要である(De Silva,2010)。

結論

統計的にみるとネット自殺は大した現象ではないと思われがちではないが、大衆文化(アニメ、漫画、映画)と被害者の年齢をみるとマスコミ報道が非常に多い。日本における自殺の現状が昔の日本文化と関係があるはずである。日本の自殺に関して主の特徴は文化的な美観化(エスティック)である。自殺の日本文化的な知覚はアメリカの知覚より柔軟である。日本で自殺は成熟と責任の兆候として道徳的にとらえられている。

伝統的にも日本の自殺が認められたものである。日本がかつて豊かな自殺文化を持っていると思われる。日本は「自殺の国」だと知られているので自殺事件のことが頻繁にメディアに取り上げられている。新しい現象はいわゆる「ネット自殺」である。全国の自殺率によって、実際にネット自殺の割合が少ないがネット自殺の被害者は若者が多く見られている。ネット自殺はメディア上で特に注目を浴びていた理由は、被害者の年齢である。インターネット上のある自殺ホームページや自殺掲示板が自殺に関する情報を給されている。ネットの世界では匿名の書き込みが多くなっている。自殺願望のある若者がインターネットを使用し、自殺に関する情報(自殺方法、同士を募る)が匿名で取得できる。いわゆる日本の「自殺掲示板」に入る人々は4つのグループタイプを含んでいる。それは:「援助」、「目的不明確」、「援助・相談・打ち明け・克服・治療」、「自殺準備」。自殺ウェブサイトでもっと多いトラフィックは自分を行き残す動機や楽を求めている人である。しかし、数ある人にとってこの楽を求めることが自分の命を自ら奪うことまでに及ぶ。しかしながら、SuekiとEichenbergによるとこの掲示板を通じて四つのあらゆるユーザタイプが自殺思想を減少させたことが明確になった。日本では、たとえ自殺系サイトを規制したくても、表現の自由のもとで、禁止するのは困難である。日本のインターネットのプロバイダーが技術的な理由で簡単に禁止できない。潜在的な自殺傾向を持っている患者の評価や治療や予防にも役立つ。掲示板とEメールを通じて相談を提供できる。掲示板の書き入れを見ると自殺をしたいと思ってしまうユーザーは学生、フリーター、ニートが多いと分かる。若者が自分の能力を信頼できなくなる。学校と大学も争う所ではなく知識欲が旺盛であるべきである。今後の自殺事件を防ぐためには苛め問題、鬱病、パワハラ、セクハラなどの問題から目をそらし無視しないことが我々の社会の一員としての義務である。政府も民主主義社会のために理想的な法的枠組を制作する責任を背負っている。一方、必要に応じ援助の愛の手を差し伸べることが我々の人間としての道徳的な義務である。政府と住民達が手を組み、力を合わせより明るくてより平和な世界を生み出すことができる。

今後、本研究で見出した長所を利用し、自殺予防の方針に基づいて、プログラムを開発・実施することができるならば、数々の尊い命を救う可能性が高まるだろう。

参考文献

Adekola, O. Alao, *Cybersuicide Review of the Role of the Internet on Suicide*, *Cyberpsychology and Behaviour*, vol. 9-4, pp.489-493, 2006

Hagihara Akihito, *Internet Suicide searches and the incidence of suicide in young people in Japan*, *Eur Arch Psychiatry Clin Neurosci*, 262, pp.39-46, 2011

Ozawa, De Silva Chikako, *Shared Death, Self-Sociality and the Internet Group Suicide in Japan*, *Transcultural Psychiatry Journal*, vol. 47-3, pp.392-418, 2010

Ozawa, De Silva Chikako, *Too Lonely to die alone, Internet Suicides and Existential Suffering in Japan*, *Cult Med Psychiatry Journal*, pp.516-551, 2008

Eichenberg Christiane, *Internet Message Boards for Suicidal People: A typology of Users*, *Cyberpsychology and Behaviour*, vol. 11-11, pp.107-113, 2008

Morahan, Janet, *Internet Abuse*, *Social Science Computer Review*, vol. 23-11, pp.39-48, 2005

Naito Ayumi, *Internet Suicide in Japan: Implications for Child and Adolescent Mental Health*, *Clinical Child Psychological Psychiatry*, 12, pp.583-597, 2007

難波・紘二, 『覚悟としての死生学』, 文藝春秋,(2004)

Pinguet, Maurice, *La mort volontaire au Japon*, Gallimard, 1991

Sakamoto Akira, *The Internet and Suicide, The Reality of Suicide Prevention*, pp.240-247, 2011

Shitaraba, 「自殺掲示板」 <http://jbbs.shitaraba.net/computer/30691>, (3月20日参照)

Sueki Hajime, 「自殺系掲示板の利用動機の類型とその影響」『心理学研究』81 巻6号 577-584 頁, (2011)

Suler John, « Internet Therapy »

<http://users.rider.edu/~suler/psyber/psyber.html>, (2004) 3月20日参照

Ueno Kayoka, 「Suicide as Japan`s major export? A Note on Japanese Suicide Culture」
http://espacoacademico.com.br/044/44eueno_ing.htm, (2005) 5月3日参照

Usui Mafumi、「ネット自殺の心理とネット自殺予防」

<http://www.nseiryu.ac.jp/~usui/news/jisatu/2003/net.html>, (2003) 5月4日参照